

昭和文学の水脈

紅

昭和文学の水脈

昭和五十八年一月二十五日 第一刷発行

著者 紅野敏郎

装幀 小松桂士朗

発行者 三木章

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二二二 郵便番号 一一二
電話東京(〇三)九四五―一一一(大代表)
振替東京八一三九三〇

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 大製株式会社

定価 二八〇〇円

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。

©Toshiro Kōno 1983, Printed in Japan

ISBN4-06-200244-2(0) (文一)

目次

1

山室静・平野謙・本多秋五ら「批評」の時代 9

本庄陸男・大井広介・平野謙・本多秋五・野口富士男ら「槐」「現代文学」の意義

27

埴谷雄高・山室静・久保田正文ら「構想」の検討 58

佐々木基一・荒正人・小田切秀雄ら「文芸学資料月報」その他 88

2

中野秀人・花田清輝ら「エクリバン」「東大陸」「文化組織」の時代 99

野間宏・富士正晴・竹之内静雄ら「三人」の検討

124

猪野謙二・寺田透・立原道造・杉浦明平ら「偽画」「未成年」の意義 189

酒井森之介・高田瑞穂・伊沢元美・平田次三郎・佐伯彰一ら

「群島」「赤門文学」の時代 218

高見順・渋川驍・稲垣達郎・吉田精一ら「大正文学研究会」前後 240

3

復刊「三田文学」の出版 267

第三次「早稲田文学」の意義 290

仏・独文学者と昭和十年前後

——「ヴァリエテ」「仏蘭西文芸」・「カスタニエン」「文学精神」——

4

岡田三郎・豊田三郎・野口富士男ら「あらくれ」「作家精神」前後 349

田辺茂一・伊藤整ら「文学者」の時代 367

野口富士男・椎名麟三・船山馨ら「新創作」前後 385

山本健吉・吉田健一・伊藤信吉・西村孝次・中村光夫ら「批評」の意義 409

島尾敏雄・阿川弘之・真鍋呉夫ら「こをろ」の時代 435

あとがき 457

昭和文学の水脈

1

山室静・平野謙・本多秋五ら「批評」の時代

『国文学研究』（早大）昭和39・10

戦後文学の出発を主導し、戦後文学の中核体となった雑誌「近代文学」が、十九年の歳月を経て、ここにいよいよ巻を閉じる時がきたという。ある種の感慨がわくのも当然のことであろう。止めるべき時が近づいたことをたがいに意識し、しかもその時は、ただらと「野たれ死に」のようなかたちではなく、「きちんと折目をつけて」止めようという申しあわせも、その年のはじめ頃からなされてもいたし、（昭和39・2 編集後記）公の表明のようなものもすでになされた。終刊がどうもはつきりしないというような世の多くの同人雑誌とはちがっていたのである。たぶんこの小稿（*昭和39・7）が活字となる頃にはみごとな終刊号が世に送り出されていることであろう（*周知のように、八月一日附で、第十九巻第三号、通巻一八五号の豪華な終刊号が出た）。従来もそうであったが、今後もさらに多くの人々によって、いろいろな立場からの戦後文学史が書かれるであろうが、その際、必らず「近代文学」の果たした役割、戦後文学史における「近代文学」の占める位置、その同人たちの仕事の質の討究が、まずまっさきに行なわれるにちがいないと思う。

スターティングメンバーのうちの、同人中最年長者である山室静の手によって『近代文学』

も第十九年に入った。長く続けばかりが能ではないが、戦後直ちに出發して、幾多の問題を提供し、多くの作家・批評家を送りだしながら、今日まで続いてきた息の長さと地力のほどは、十分に自祝してよいであらう」とその年の一月号の編集後記に書かれたことからわかるように、その持続と成果のみごときは、主観的にも客観的にも、じゅうぶんに祝されて然るべきことと思われる。それはたしかに群を抜いたもので、近代文学史上の偉観といつてよからう。

もちろん、十九年という歳月の重みは、かなり複雑な曲折や変転を、その雑誌や同人の上にしかとみることもできるが、その持続と成果は、とにかくにもただごとではなかった。いちはやく放たれた西田勝や三好行雄らの戦後文学史に関する論考においても、ただごとでなかったさまが指摘されている。しかもこのことは、たんに戦後の文学史上のこのみではない。すでに知られているように、鶴見俊輔・久野収・藤田省三らの提唱によって、文学史のみならず、さらに広く戦後の思想史のなかで、その果たした役割が正当に位置づけられるという操作も着手されはじめている。すなわち、「近代文学」の果たした役割は、戦後思想史のなかでは、「テーマ・セッター」としての光榮を有していること、さらにテーマの設定のみならず、論争のすすめ方においても、方法論上の「多元主義」を確立し、戦後思想史の「正統、オーソドクシー」になっているという評価がそれである（『戦後日本の思想』所収）。鶴見俊輔の発言にもあるように、創刊以来「近代文学」は、主体性論・世代論・戦争責任論・転向文学論・知識人論・組織と人間論など、戦後を通過した人ならば、ひとたびは「誰でもが口にした」戦後文学史・思想史の根幹的な「テーマ」をいちちはやく、鋭く適切に提出し、執拗にくだいさがつて展開してみせた。「近代文学」の進展とともに、文学への真のめざめを的確に意識した戦後世代がいかに多かったことか。しかもその読

者は、たんに文学青年だけではなく、広く一般の知識人、知的青年をもまきこんでいったことは、その後の多くの人々の証言によってもあきらかである。

ところで、わたくしがいまここで問題にしたいのは、十九年にわたって刊行された雑誌「近代文学」の果たした役割を、西田勝や三好行雄、あるいは鶴見俊輔らにならって、戦後の文学史・思想史のなかで巨視的、全体的に把握し、直接検討する、ということではない。光栄ある「近代文学」の終刊を耳にして、大きくわたくしをゆすぶったものは、むしろ戦前にさかのぼった「近代文学」前史の検討ということであった。やがては「近代文学」の全体的、全円的な検討に立ち入っていきたい気持は底辺にあるのだが、さしあたっての関心なり興味なりは、「近代文学」創刊以前にある。この場合、まっとうなかたちでまさしく「以前」は「以後」に連続する。

「近代文学」の創刊時のメンバー（年齢順にいうと、山室静・平野謙・本多秋五・埴谷雄高・荒正人・佐々木基一・小田切秀雄）七人は、いずれも昭和文学のかんじんかなめの地点ともいえる昭和十年前後に貴重な青春期を送り、なんらかのかたちでマルキシズムとのゆるやかなかわりを持ちつつ、その精神の形成が行なわれ、昭和十年代の、いわゆる「暗い谷間」の文化的空白の時期に、じっと耐えつつ、ひたすら自己の牙をみがき、自己の蓄積を重ねてきた人々ばかりである。文字通り「戦後」を生ききったかれらではあるが、「戦前」からの蓄積のプロセスあつての「戦後」であったことを、かれらほど雄弁に語っているものはあまりないと思う。ところが、かれら相互の結びつきやその蓄積のプロセスは、おおまかなところでは指摘されてはいても、ひとりひとり個別的に深く検討されてはいないというのが実状である。かれらの仕事の核は、戦後はじめて花開いたというのではなく、戦前にすでに確乎としたものが築かれていたのである。

「近代文学」の百号記念(昭和30・11)に、埴谷雄高が『「近代文学」創刊まで』を書いているが、これはあくまでも「創刊」前後の実態である。もちろん、この一文は、敗戦と同時に「どうしても出現しなければならぬ内的な奔出力によって」生まれてきたもようをきわめてダイナミックにいきいきと描きだしたもので、それ自身、文学的感動を伴わずにはおれぬものだ。一種の記録文学の類に入るものとして評価されて然るべきものであらう。空前の動乱期に「天の時、地の利、人の和」を得て、着実に、しかも自他をもまきこむばかりの熱情をもってつくり出されていった画期的な創刊号の、背景なり、創刊当初の同人たちのめざしたものの実態をば、それによってじゅうぶんに知ることができる。わたくしのもくろみは、この埴谷文をすくなくとも昭和十年前後くらいまでさらにさかのぼらせてみたいというところから出発する。

「近代文学」前史を構成するいくつかの核が存在すると思う。核なくして展開はあり得ない。たとえば、本多秋五・平野謙にそくしていえば、名古屋の八高時代もまた核のひとつに考えられもする。さらにいうならば、「古い記憶の井戸」(『近代文学』に九回にわたって連載)に書きこまれたような、本多秋五独特の出自、環境にまで遠く及んでいくこともできよう。本多の場合、とくにこの出自、環境の問題は、きわめて大切な要素のひとつとさえなっている。わが家族、わが郷里が、いかに情感こめて思い出されていることか。また、山室静の、本多や平野とともに所属していたプロ科芸術部会の時代や明治文学談話会時代、それも有力な核のひとつになるはずである。

かれらが関係した雑誌にそくしているならば「東大文化」、木犀社・福田久道編集の季刊誌「批評」、耕進社・山室静編集の「クオタリイ日本文学」、「マルクスレーニン主義芸術学研究」、耕進社・明治文学談話会(代表神崎清)編集の「明治文学研究」、左翼と芸術派の相互滲透の時期の、プ

ロレタリア文学系の「文化集団」、批評社（平野謙・山室静同人・山室静編集の「批評」の路線ということになる。わたくしは、この本多・平野に、山室が交錯した路線こそ、「近代文学」が生みだされてきた根幹的な第一の核と考える。つづいて、日支事変の進展のさなか、埴谷雄高が中心となった「構想」（荒正人・佐々木基一らも同人）の時代、「世田谷トリオ」といわれる荒正人・佐々木基一・小田切秀雄の「文芸学資料月報」の時代が、第二、第三の有力な核を形成するのである。それらが戦時中の同人誌「現代文学」の時代に至って、おおらかな交響的な相互交錯が行なわれたのである。大観堂から出ていた「現代文学」には、大井広介・坂口安吾・杉山英樹・平野謙・山室静・荒正人・佐々木基一・小熊秀雄・菊岡久利らに、本多秋五・小田切秀雄・岩上順一らもそれぞれ寄稿、いわば埴谷を除く六人の同人が、ここで同時におのがじしのかたちではあったが、ともかくも集結した姿をみせた。そのあとは、平野・山室・荒・小田切らにみられる大正文学研究会への参加とか、本多のようにトルストイの『戦争と平和』一書にのみ傾注する、いわば密室のいとなみというかたちが以下つづくわけである。このことからあきらかなように、短かくて数年、長くて十数年にわたる友情の歴史が厳として存在していた。「近代文学」同人の、白樺派流にえば「和而不同」という「人の和」は、決して一朝にして成りたったものではなかったのである。

それらの核のひとつひとつの地点を大切に押えていく操作は、じつは複雑多岐にわたる昭和文学史をつらぬく一本の赤い糸の検討ともなっていくのだが、さしあたって、「近代文学」前史の、核中の核とも考えられる山室静・平野謙中心の「批評」というささやかな同人雑誌にそくして考えてみたい。

一同人雑誌「批評」は、戦後文学の中核体となった「近代文学」の、文字通り原型であったと思う。ひきつづく原型は、「現代文学」だと思いが、戦時中の抵抗の拠点でもあった「現代文学」に比べて、小型ではあるが、いっそう質朴で、純度がたかく、原型というイメージにびったりするものである。木星社の「批評」や耕進社の「クオタリイ日本文学」などの時代は、いわば一般にたかまった明治文学研究熱のさなかで、その雰囲気の中に身を置いてはいるものの、かれら相互の結合の意識はさまで強まっていたとはいえなかったようだ。「批評」の時代になって、はじめてわれらの「同人雑誌」というかたちが結実したのである。この「批評」には、山室・平野・本多のほか、青木文象の名でもって登場する佐々木基一もいて、七人の同人中、四人までがここに結集する。

創刊号は、昭和十一年七月の発行、その目次は、つぎのようなものである。

肉体の倫理

池田寿夫

一一〇

『断層』の性格について

松田康雄

一一二

めもらんだむIIあとらんだむ

—「何の為の芸術か」について—新島繁

二二二

理性と批評 ミドルトン・マリ 橋本福夫

三〇三

文芸時評

山室静

四〇四

日常(小説)

北川静雄

四九五